現代民俗学会第三九回研究会

# 戦う身体の民俗学

報告者

**中里亮平**（長野大学非常勤講師）：

たたかう祭礼―非日常における身体と正しい振る舞い―

**池本淳一**（松山大学准教授）：

どこで、誰と、どこまで戦うか？―『戦う身体』の日中比較―

**清水亮**（東京大学大学院）：

兵士の身体の解放と統御

―戦前期土浦の盛り場における暴力に着目して―

コメンテーター

**戸邉優美**（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

司会・コーディネーター

**鈴木洋平**（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

2017年9月30日（土）

13:00 ～ 16:45

埼玉県立歴史と民俗の博物館　講堂・講座室

# 趣旨

本研究会では、民俗学が主たる対象として取り上げてきた日常の境界線上にある「戦う」という文脈から、人々が身体を通じて身に着ける行為について検討する。

地域社会や環境への適応をする中で、よりふさわしい行動を取っていくプロセスについて、民俗学では人生儀礼をはじめとして研究を積み重ねてきた。一方で、ときに非日常とされる状況にあっても、人々は何らかの形での適応を必要とする。特に、戦うこと、勝利を通じて生き残ることが必要とされる状況下においては、あるべき振る舞いを身に着けるというプロセスが非日常的な文脈においても重視されていたと考えられる。「適応する身体」について、「たたかう」という文脈から考えてみたい。

千葉徳爾は、仮定した人と動物との「たたかい」の要素として、

①一対一の対等の形

②双方の肉体的、精神的な全力をあげてたたかい

③一方が完全に再起し得ないか死ぬまで行う

などを挙げている。千葉の問題意識は、集団の勝利を目指す「いくさ」とは異なる原理で動く「たたかい」の要素が軍隊組織でも維持されていたことと、近代戦との齟齬により生じる問題にあった。今回は千葉の試みを、「たたかい」という原理を身に着ける人々の身体に軸を置いて考えたい。

「たたかい」に適した振る舞いを身に着けるとは、日常とは異なる身体動作を自らに課すこととなる。近代以前の文脈から、個別に経験されるものとしての「たたかい」に身体が接近する場として、喧嘩や武道などといった要素が挙げられる。生命を賭してたたかう側面と、日常を逸脱しないために「たたかい」の中で死者を出さないことや、たたかいを見る観客の存在は、どのようにバランスが取られてきたのか。個人の身体と、それを受容する社会との関係性と検討したい。

さらには、必ずしも個としての「たたかい」を必要とされない現代状況において、「たたかい」を身体化するプロセスとはどのようなものか。また、近代以降の日本において「たたかい」における振る舞いは、社会的な立場として存在する「たたかい」を目的とした職業的身体として、兵士などに表わされてきた。近代において「たたかい」あるいは「いくさ」という非日常的行為を職業化した存在である「兵士」は、地域社会にどのような影響をもたらしたのか。日常から切り離された「いくさ」の文脈中に構築された身体は、日常世界に何をもたらすのか。兵士の身体技法を身に着けて日常に回帰する人々は、地域にどのような影響を与えたのか。

本研究会では、日常につながりながら、異なる身体のあり方へと適応していこうとする人々が、状況の間でどう立ち振る舞い、自らの身体、あるいは他者の存在へと向き合っていくかに注目する。ときに自ら踏み込んでいき、ときに否応なくかかわらざるを得ない状況として現れる、「たたかい」の諸相を、身体という要素を媒介にすることで、日常とのつながりを含めて検討したい。

なお、本研究会では木刀制作・販売を行う粋陽堂の協賛により、講堂に隣接する講座室内にて木刀展示を行う予定である。展示する木刀の多くは販売品であるが、粋陽堂側の方針により手に取ることが可能である。木刀は、近代以降に日常化した「たたかい」の中で、身体と武器の間で身体を延長させるものとしてとらえることができる。木刀展示を通じ、実際に各種の木刀に触れることで、多様な木刀が存在する意義と、実際の刀に対する意識との関係性につき体感を通した思考のきっかけとすることを目的としている。

協賛：粋陽堂